

川柳 —ハンガリー語訳から見えるもの

上 條 光 子

Dr. FARKAS Imre (執筆協力者)

要 旨 今回は川柳をハンガリー語訳にし、日本人とハンガリー人との相違点にもふれながら、この4年間に試みた日本の愛唱歌100曲のハンガリー語訳の総括としてハンガリー語の特性をまとめたもの。

<序>

本紀要の第27号で「川柳とエスプリ」と題して川柳のフランス語訳を試た。まず簡単に川柳を定義しておく。川柳の古典といえば江戸時代の「古川柳」、人生のあらゆる面を穿つことを信条とする日本生まれの日本育ちの短詩、韻文詩。情にもろい心根を短歌から、五七五の短さを俳句から受け継ぎながら両方にある自由奔放な気性をもつもの。今回は古川柳のなかで第27号で触れなかったものに絞って、日本独自の川柳に流れる諷刺と揶揄はハンガリー人にわかるかどうかが本稿のテーマである。今回はこれまでのハンガリー語訳（第32-35号に発表したもの）の統括を補足したい。

<本論>

1. うまそうに なにやら煮える 雨宿り

Csodás illata
Száll finom ételeknek
Védve esőtől.

ハンガリー語訳を英訳して意味を明らかにしていこうと思う。以下同様にする。

Wonderful smell
of good foods spread in the air,
protected from rain.

「軒先きをかりて雨宿りしていると中からプーンといい匂いがしてくる」と訳した。

英訳すると長くなるのにハンガリー語では日本語と同じ数のシラブルに訳す事が出来た。しかも意味はよりわかりやすくなった。ハンガリー語の方は良い香いが主役になってしまったが。

2. 本降りに なって出て行く 雨宿り

Mikor igazán
Kezdett esni, indultam
Tető alól el.

When it really
began to rain I started
from the roof.

「辛抱強く待ったのについに本降りに、早く見切りをつけて出ればよかった！」そんな見込み違いの悔しさを詠んだ句。

直訳のようだが 言いたい事を言い当てた訳。しかも五七五を守って。

3. 男と女

半分つつぬれて

相合い傘

Férfi és a nő

Félig ázik mindkettő

Egy esernyővel

Man and woman

Both of them are wet half
with one umbrella.

一本の傘に寄り添う二人がぬれながらも仲良く歩くすがたを描いた句。

日本語の直訳でぴったりの訳語が出た。シラブルの数もぴったりで。

4. おれを

したかろうと思う

いい女

Engemet

Tűnik szeretni ez a

Csodás nő.

Me

Is seemed to love by this
wonderful woman

「そう思っているだろう」というのも男の想像、「すてきな女」とやくした。ロマンチックな甘い主観的な日本の男。

添削をしたハンガリー人は stupid man everywhere と言って笑った。日本人男性だけではなかった。

5. 桜見に

夫は二丁

後から出

Cseresznyefákat

Megy nézni kétszáz méterrel

Asszonya mögött.

Cherry trees

He goes to see 200 meters

Behind his woman.

男女が一緒にいることを当人たちもいさぎよしとせず。妻と並んで歩くどころか二丁も離れて歩くとは。世間の目を気にして生きる典型的日本人。

ハンガリーでも昔は 奥さんの後に出る人もいたとか。ただし世間の目を気にしてではなく夫の権威を示すためだそうだ。

始めは3段目は Felesége mögött. ‘felesége’ (his wife) にしたがシラブルが6音なのでシノニムの ‘asszonya’ (his woman)にして5音に揃えた。

6. 朝帰り

だんだん家へ

近くなり

Ledér nők után

Az otthon közeledtén

Retteg: Mi lesz most?

After the night with easy women

His home is coming.

He is frightened: What will happen now?

「朝帰り」が吉原からの帰りのこと、夜這いの帰りであることは日本語では自明の事だがその説明ないならばわかりにくい。一步一步家に近付くにつれ、不安と恐怖は募るばかり。

ヨーロッパではパブが閉店になって戻ってくる亭主をdrunken pigと呼び、料理に使うローラーを手にして待つ妻がこの場合に似ていると言って笑った。

第一行目の最初の訳はRossz nőknél volt éjjel, (He was at the bad women in the night) だったがシラブルを揃えたことでかえってスッキリした文になった。

7. 朝帰り

行く先程の

知恵は出ず

Ledér nők után

Magyarázná hol volt el...

Könnyebb volt este!

After the night with easy women

he would explain where he was away
It was easier in the evening.

出かれる前は『謡いの稽古』だの『村の寄り合い
に行く』だのとうまい口実があるのに翌朝は浮かば
ない。良い知恵浮かばず諦めごちの日本語。

ハンガリー語でも夜の方が言い訳が簡単だったと
訳すにとどめた。

8. 女房に
土手で遭ったは
百年目

Feleségem várt
A kupinegyed partján.
Mennykő az égből!

My wife waited
At the bank of the prostitute district.
Thunder from the sky!

『土手が吉原に通じる道の途中にある』から言い
訳のきかぬ絶対絶命のピンチ感が「百年目」にある。
不意打ちを食らうに当たる言葉はハンガリー語で
は「落雷」と言うてくれた。

9. 書き置きは
めっかり易い
とこへ置き

Egy üzenetet
Hol könnyű megtalálni,
Hagytam elrejtve.

A message
where it's easy to find
I left hidden.

直訳して『簡単に見つけられる場所に隠した』と
訳した。日本語は受け身だが。

10. 悔やみに
行って先ずと
言いだし困り

A részvétünket

Kezdtük: "Először is..."
S itt megakadtunk.

Our condolence
we started: "First..."
at this point we stopped suddenly.

弔問に行って悔やみの言葉はすらすらと言えるも
のではない。『先ず』と言ったために困ってしまう。
この句は四六七の変型句だがハンガリー語でも五六
六の変型句になった。期せずして。

次は写生句の中から10句を。

11. 忍ぶ夜の
蚊はたたかれて
そっと死に

Titkos találkán
Az agyonnyomott szúnyog
Is halkan hal meg.

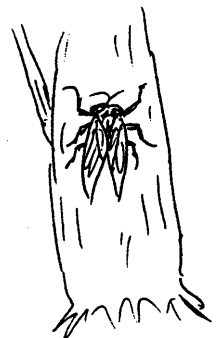
On a secret rendez-vous
Even the slapped mosquito
dies silently

一目を忍んで通う時は蚊をそっと打つ。それをそ
っと死にと詠んだのが技巧。

12. おさえると
蟬は調子を
かえて啼き

Ha nyakoncsipik,
A kabóca éneke
Is másképpen szól.

If grasped
even the song of cicada
will sound differently.



つかまえられると啼き声の高さが変わる蟬。ほか
に「つかまると地声になって蟬は啼き」という句も
ある。今のハンガリーには蟬が存在しないが、旧ハ
ンガリー地だったクロアチアやバルカン半島に存在
するので「蟬」という単語が存在する。

13. かまきりは
おんぶ仕様の
手付きなり



Ájtatos manó.
Bébi, ha kér hogy vedd fel,
Úgy tartja karját.

Mentis
like baby asking to be taken up
it keeps its arms.

かまきりの形は小さな子供がおんぶして！といっ
て両手を差し出すようなかつこうだ。ただし日本
のおんぶは後ろからだがヨーロッパは前からのだっ
こスタイルなので、子供がねだる姿に似ていると訳
した。ハンガリー語のかまきりという単語は分解す
ればÁjtatosは聖なる霊に満たされている人をさし、
manóは妖魔、小人のことをいうし、他にかまきり
をimádkozó sáskaともいう。即ちimádkozóとは
祈ることだしsáskaはいなごをさす。かまきりの姿
をその呼び名にしているハンガリー語はおもしろい。

14. ぶちまけるように
千鳥は
降りるなり

Zsákból a homok:
A tengerparti lilék
Futnak lefele.

Sand from a bag:
Plovers of the beach
Run down.



千鳥の群れがいつせいに舞い降りる力強さを感じ
られる句。ぶちまけるようにを「袋から砂を払うよ
うに」と訳したが、なぜ降りるのか問われた。千鳥
はふつう走り回るから。

最初は

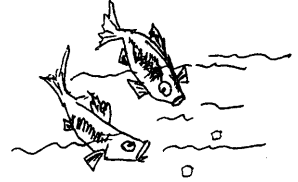
Mint zsákból homok,
A tengerparti lilék
Szaladnak lefele.

Like sand from a bag:
Plovers of the beach

Are running down.

と訳したがシラブルの数が6個になるので上の訳
にした。

15. 明日知らぬ
いけにえの鯉の
餌に懷き



Nem sejtven jövöt
Boldog ponty üvegkádban
Hizik finomra.

Not noticing the future,
Happy carp in a glass tank,
gains weight to become delicious.

鯉の運命をすなおに詠んだ句だがハンガリー語で
は説明的に「おいしくするためにえさをあげる」と
言うのでかえって鯉のおめでたさが出る。

16. 熱そうに
足を縮める
焼きするめ



Forróság látszik:
Rövidülnek a lábai
Sült tintahalnak.

Hotness can be seen:
legs are shortening
of the burnt cuttle fish

そのまま写生句としてわかるかと問うたら

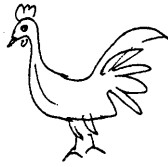
No! strange impression, because when it's
cold, shorten legs, but when it's hot, not
shorten, heat dilatation (熱くなれば 電線やケー
ブルが広がること)からいって縮むのは妙だと言う。
彼等にはいかを焼く習慣はないので見た事がないよ
うだ。

最初は一行目を Látszik, hogy meleg van: We
can see warmth: と訳したがシラブルが6音に
なるし warmではなく hot だから変えた。

17. にわたりの
何か言いたい

足づかい

Ez a kiskakas
Mintha mondana valamit,
Pont úgy sétálgat.



This little cock
as if it said something
il walks exactly

鶏は足を踏み出すにも首を傾ける。分別くさい様子から「なにかいいたい」と形容されている句。彼は大事な事と言わなくていいのかと聞いたが、日本語の「なにかいいたい」と言うことばにはそれほど強い意味合いはないと答えそのまま訳した。

18. 糸つけて

あるかと思う
蝶二つ



Mintha zsinórral
Volnának összekötve,
Száll a két lepke.

As if with thread
they were tied together
two butterflies fly

二匹の蝶が一緒に飛ぶ様子が糸で結ばれているようにみえると訳した。

19. 蟻一つ

娘ざかりを
裸にし



Egyetlen hangya
Vetköztette a szende
Lányt meztelenre.

A single ant
made the girl take off her dress
totally nude

恥ずかしいさかりの娘にたった一匹の蟻が入りこんでとうとう裸にしてしまった、という誇張と人の意表をつく古川柳独特の諧謔。作品のイメージ効果、

アピールを強めるための技法を誇張法というがその代表例として尾藤氏がこれをあげている。(注1)

最初は
Egy hangya miatt
Vetközött szégyenlősen
A lány meztelen.

Because of an ant
Took of her dresses shyly
The girl to nude.

と訳したがこの句の主役は蟻だから訳し直した。

20. 泣き泣きも

良い方をとる
形見わけ

Még könnyek folynak,
De már elveszik mi jobb,
A hagyatékból.

Still tears flowing
but they already are taking what is better
from the heritage

「よい方をとる」を良い方を手にとると訳した。日本語は「人目を気にしながらも一個だけよさそうなのを手にする」ことにおかしみを見るがハンガリー語では片目は泣いているが片目はすでに良いものを探す姿におもしろさを見い出す。

最後にこの川柳の同想とおもわれる明治時代の川柳を紹介しこの稿を締めようと思う。

骨あげに
泣き泣き金歯
探して居

Égett csontok közt
Könnyön át aranyfogat
Kutatgatnak mind.

Among the burnt bones
through the tears for golden teeth
they all are looking for.

『骨揚げ』は説明を要した。江戸時代の句より具体的で生々しい句。ハンガリー人の彼は「なぜ死んだ人の骨や金歯をとっておくのか、200年たって聖人になるならわかるが」と言う。

<結論>

川柳の文芸的特性をなす三要素は、尾藤氏によれば、穿ち、おかしみ、軽みである。(注2)江戸の日常のなかにうがちの対象となるべく矛盾が多かったのでそのまま写実すればうがちになった。江戸のうがちは、ひやかし、からかう気分をいうが、ハンガリー語訳からはひやかしではなく、一般にいう『うがち』隠れた真実をえぐりだす鋭さを感じられる。

本稿のテーマである川柳をハンガリー語に訳すときに必要なのは日本の歌100曲をハンガリー語に訳した時と同様、省略し飛躍する非論理的句から何を言いたいかを明確につかむこと。ともに洒脱さを生命としているが日本語のほうは詠み尽くさず言い尽くさずに余情を含むがハンガリー語のほうは言い尽くすが余韻を残す。

ほのかに感じさせるだけの川柳がハンガリー語になるとくっきりと輪郭が描かれリズムまで感じられる。語尾がきれいに揃うので。川柳のおかしみがハンガリー語にかかわるとすべてのうがちが人間描写にかわる。川柳の底にある人間へのあくなき着眼力と共通しているように思われる。すなわちハンガリー人にも大体は理解できたのではと思われる。「納骨」を除いて。

今回でハンガリー語訳を最後にしたいのでその言語的特性についてふれておく。

ハンガリー語は豊富な語彙と多くの接頭語や接尾語を持っているので意味を変えない程度に単語を長くしたり短くしたりして音韻の数を調節することが出来た。

たとえば 童謡『うさぎとかめ』の「もしもしかめよ かめさんよ」の音節は7音プラス5音、そこでかめは teknös 2音なので「かめよ」をかめさんにあたる Teknös Úr (3音)と訳し「かめさんよ」は同じ意味の Teknösbéka Úr と訳して5音にした。川柳でもNo.5, 6, 8, 14, 16で述べたように豊富な同意語のおかげで音韻の数を揃えそれが文を引き締めた。

以上から他の言語(フランス語や英語ですで見えて来た様に韻の数を揃える事は至難のわざ)に比較すれば音韻を揃える愉しみがあったこと、物理学者のハンガリー人 Dr. Farkasの協力無くしては適切な翻訳は出来なかったことを報告してこの稿を閉じる。

【注】

- 1 『川柳総合事典』 p.118
- 2 『川柳総合事典』 pp.137-140

【参考文献】

- 浅野健二著『日本歌謡の研究』
東京堂出版 1961年
- 興津 要著『探訪江戸川柳』
時事通信社 1990年
- 高野辰之著『日本歌謡史』
五月書房 1978年
- 田辺貞之助著『古川柳風俗事典』
青蛙房 1962年
- 田辺聖子著『古川柳おちぼひろい』
講談社 1976年
- 浜田義一郎著『江戸川柳事典』
東京堂出版 1968年
- 佐藤愛子著『古川柳ひとりよがり』
読売新聞社 1984年
- 山路閑古著『古川柳名句選』
筑摩書房 1968年
- 麻生磯次著『俳句大観』
明治書院 1971年
- 下山山下著『江戸は川柳、京は軽口』
山手書房 1992年
- 室山源三郎著『江戸川柳と謡曲』
三樹書房 1990年
- 篠原義近著『時事川柳百年』
読売新聞社 1990年
- 神田忙人著『江戸川柳を楽しむ』
朝日新聞社 1989年
- 鈴木勝忠著『江戸庶民風俗』
雄山閣出版 1978年
- 尾藤三柳著『川柳総合事典』
雄山閣出版 1984年
- 川本茂雄編 『言語』 合本第一巻
大修館書店 1977年